

Title	木製品における弥生時代前期の画期 : 広鋤I式の製作工程の変化を中心に
Author(s)	中原, 計
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2003, 37, p. 27-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48077
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

木製品における弥生時代前期の画期

— 広鋤 I 式の製作工程の変化を中心に —

中原 計

はじめに

弥生時代の遺跡から出土する木製品は溝などから出土する場合が多く、詳細な帰属時期を決定することが容易ではないが、近年、低湿地遺跡の調査例の増加に伴い、時期を限定できるものもかなり増加してきている。それらの資料を利用して、時期による形態の変遷を検討した研究も行われつつある。

本稿では、縄文時代晩期後半～弥生時代前期の広鋤の製作工程に着目することにより、その時期的変遷をみる。また、他の木製品や石器、土器の状況と比較することにより、広鋤の変化がどのような意味を持つのかを検討する。

1. 研究史

広鋤の時期的な変遷についての研究は、黒崎直が奈良県唐古・鍵遺跡、滋賀県大中の湖南遺跡など主に近畿地方の資料に基づき、検討を行ったものが最初である（黒崎 1970）。その後、近畿地方の資料集成の結果をふまえて、上原真人が変化期をより明確に捉えた（上原編 1993）。近畿地方以外の地域の資料を扱った研究としては、山口譲治が北部九州地域の変化期を捉え（山口 1989）、山陰地方については中川寧が出雲地域の資料を用いて概観している（中川 2000）。広鋤の形態の地域性に関する研究には、ま

ず、木村有作が愛知県朝日遺跡、同勝川遺跡の資料と他地域の資料を比較することで、東海地方西部の特徴について論じたものが挙げられる（木村 1988）。また、樋上昇は弥生時代中期以降について、東海地方の資料と他地域の資料とを比較し、近畿地方との共通性を指摘している（樋上 1989、1990）。工藤哲司は宮城県中在家南遺跡の資料を検討する上で、全国の弥生時代前期、中期、後期の資料を概観している（工藤 1996）。近年では、青島啓が上原の広鋤分類（上原 1993）にもとづいて全国的な集成を行い、地域的な広がり広さを指摘している（青島 2003）。

広い範囲での鋤・鋤についての集成作業も行われており、西日本や東日本の資料における時期差や地域差を検討するうえで、欠かせないものとなっている（埋蔵文化財研究会 1983、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所・東日本埋蔵文化財研究会・東海考古学フォーラム 1994）。

このような研究の進展の中で、時期による広鋤の変遷については、前期と中期、中期と後期という大きな変化点の指摘はなされている。しかし、資料の出土量の制約もあって、より細かな変化については追求できていないのが現状である。加えて、鋤は農耕具としての機能が重視されてきたため、その変化の要因は農耕技術の発展に関連付けられて説明されてきており、他の遺物との関連を念頭に置いた検討は深められていない。

広鋤の地域性については、従来はかなり狭いと考えられてきたが、現在はより広い地域性を持つことが明らかにされてきており、その伝播の状況についても解明されつつある。しかし、ほとんどの分析が主に東日本の資料に基づいて行われているため、時期的にも弥生時代中期以降を対象としたものとなっている。また、地域差が存在する要因についても、それぞれの地域の耕地土壌が異なるためという考え方が一般的である。

以上のように、広鋤についての研究は木製品の中でも最も蓄積されていると思われる。しかし、多くが資料の十分ではなかった時期に行われたも

のであり、依然大杵が捉えられた段階にとどまっていると思われる。こうした研究史の認識に基づき、本稿では、増加した資料を加えることで、広鋏のより詳細な検討を試み、同時に従来の研究についても再検討を行うことにする。

また、従来の検討は完成品の形態に注目したものである。しかし、北部九州地域とそれ以外の地域では、鋏の製作技法が異なることが指摘されている（正林 1998、山口 2000）。このため、広鋏の形態変化の分析には未製品という視点からも検討を加えることが必要であると思われる。

そこで、本稿の具体的作業としては、主に上原分類（上原 1993）の広鋏 I 式について完成品、未製品の両方の資料を扱い、検討を加える¹⁾。資料の帰属時期については縄文晩期後半～弥生前期までのものを対象とし、鋏に関する用語は上原のものを用いることとする。

2. 広鋏製作工程の変化

(1) 広鋏 I 式の形態的特徴

広鋏 I 式には、近畿地方の資料集
成から上原によって以下のような特徴があることが指摘されている。平面形は緩やかにくびれる鼓形、側面観は隆起部のある面を外彎面として反ること、隆起部は紡錘形（A1 型）を呈すること、着柄角度が $60^{\circ} \sim 70^{\circ}$ 、などである。また、泥除け装着装置として、柄孔と同じ高さに小突起や刻目を施すもの（a 類）と三角形の孔を隆起部の両側に穿つもの（b 類）と

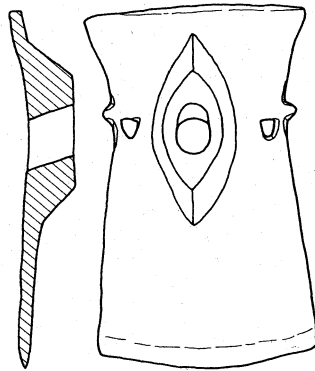


図1 広鋏 I 式の形態

表1 広嶽I式出土地名表

遺跡名	所在地	長方形	鼓形	反り有	反り無	A1	泥a	泥b	備考
(弥生前期前半)									
山越遺跡	愛媛県松山市		○		○	○			未
本山遺跡	兵庫県神戸市		○	○		○			未
			○	○		●			未
(弥生前期後半)									
比恵遺跡	福岡県福岡市博多区		○	○		○			未
下稗田遺跡	福岡県行橋市		○	○		○			連結未
			○	○		○			未
			○	○		○			未
下郡桑苗遺跡	大分県大分市		○	○		○		○	
			○	○		○			破損
			○	○		○			未
			○	○		○			未
南溝手遺跡	岡山県総社市		○		○	○			未
百間川原尾島遺跡	岡山県岡山市		●	○		○			破損
		○			●	○			未
			○	○		○	○	○	
			○			○	○	○	
			○			○	○	○	
阿方遺跡	愛媛県今治市		○	○		○	○	○	
			○			○	○	○	
		○				○	○	○	連結未
			○			○	○	○	連結未
			○			○	○	○	破損
鴨部・川田遺跡	香川県志度町	●		○		○	○	○	破損
		○				○	○	○	
		○				○	○	○	
		○				○	○	○	連結未
東神吉遺跡	兵庫県加古川市		○		●	○			連結未
北青木遺跡	兵庫県神戸市		○		○	○			未
上ノ島遺跡	兵庫県尼崎市		○	○		○			未
安滴遺跡	大阪府高槻市		●	●		●	○	○	破損
		○			●	○			連結未
東奈良遺跡	大阪府茨木市		○	○		○			破損
高宮八丁遺跡	大阪府寝屋川市		○	○		○		○	
			○	●		○		○	破損
			●	●		●	○	○	破損
			●	○		○			破損
			○	○		○			未
			○	○		○			未
鬼虎川遺跡	大阪府東大阪市		○	●		●		○	破損
瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市		○	○		○	○	○	
			○	○		○			
池島・福万寺遺跡	大阪府八尾市・東大阪市		○	○		○	○	○	
田井中遺跡	大阪府八尾市	○			●	●			連結未
			●		●	○			未・破損
瓜破遺跡	大阪府大阪市平野区		○	○		○	○	○	
			○	○		○			未
池上曾根遺跡	大阪府和泉市	○			●	○			連結未
		○		○		○			未
唐古・鍵遺跡(1次)	奈良県田原本町		○	○		○			未
(16次)			○	○		○		○	
			○	○		○			連結未

(19次)			○	○		○			連結未
(20次)			○	○		○			未
(22次)			○	○		○			未
(33次)			○	○		○		○	
(37次)			○	○		○		○	未
			○	○		○		○	
(58次)			○	○		○			未
(73次)			○	○		○	○	○	
川崎遺跡	滋賀県長浜市		○	○		○		○	
			○	○		○			連結未
			○	○		○			未
			○	○		○			未
堅田遺跡	和歌山県御坊市		○	○		○		未	
納所遺跡	三重県津市		○	○		○			未
			○	○		○			連結未
			○	○		○			連結未
松河戸遺跡	愛知県春日井市		○	○		○	○	○	
			○			●	○		未・破損

(凡例)

- ・時期は基本的に報告による共伴土器による
- ・「○」は形態が確実なもの、「●」は破損のために不明または未製品のために未確定のもの
- ・「未」は未製品、「連結未」は連結した状態の未製品、「破損」は破損が認められるもの

がみられる（図1）。

以上の特徴をもとに、各地域の広鋏I式を未製品も含めて集成すると、26遺跡で出土例がみられる（表1）。地域としては、北部九州地域から東海地方西部まで分布している。ただし、北部九州地域では諸手鋏が主体を占めている。

(2) 2種類の製作工程

広鋏I式と諸手鋏との間には形態の類似点が存在している。それは、青島によって言及されている（青島 2003）ように、平面形がくびれる鼓形を呈することと、側面からみて、隆起のある面を外彎面として反ることである。しかし、両者は製作工程が異なることも指摘されている。鋏の製作には単体製作と連結製作²⁾の種類がある（工藤 1996、正林 1998、山口 2000、飯塚 2002）。単体製作とは、あらかじめ一個体分の長さにした板材を加工して鋏を作る工程である。一方、連結製作とは、数個体分の長さの板材をそのまま加工し、ある程度鋏の形ができた段階で一個体ずつに分断する工程である。これらのうち、単体製作は北部九州地域にみられるものであると指摘されている（正林 1998、山口 2000）。つまり、広鋏I式は連結製作により作られるが、諸手鋏は単体製作により作られているのである。

しかし、近年の調査で出土した広鋏I式の中に単体製作により作られたと考えられるのがみられる。広鋏I式には未製品資料が多く、製作工程を検討しやすい。そこで、集成した資料のうち、未製品資料に注目して検討を加える。

(3) 単体製作から連結製作への変化

①広鋏I式の単体製作資料

兵庫県神戸市本山遺跡では、弥生時代前期前半に属する、広鋏I式の未製品が出土している（図2-1）。刃部幅が25cm前後であり、長さは40cmになる。同様の未製品資料は奈良県唐古・鍵遺跡からも前期に属するもの³⁾が

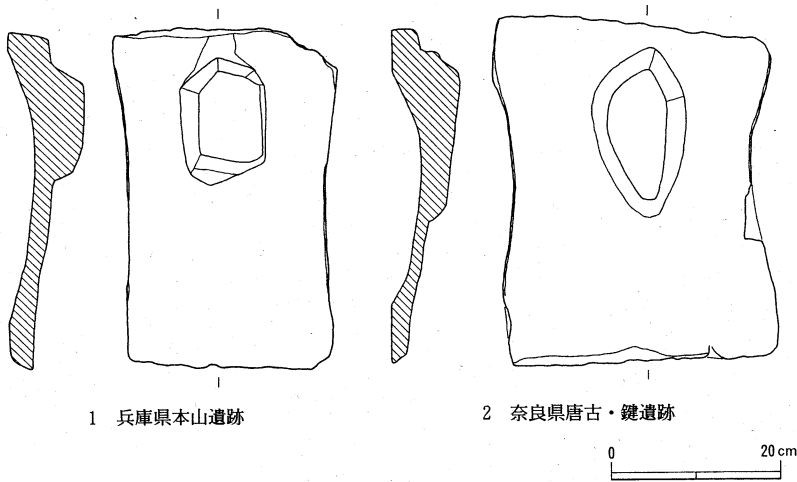


図2 広楯I式の単体製作資料

出土しており、刃部幅は30cm、長さは40cmである(図2-2)。これらに特徴的な加工として、①頭部と刃部の裏側に5cm程度の平坦面を削り残すこと、②切断痕がみられないことが挙げられる。これらに加えて本山遺跡例については、③隆起部が四角形に整形された状態のままであること、も特徴である。

まず、平坦面を削り残す加工についてであるが、これは、諸手鋏にも認められる(図3)。諸手鋏は単体で製作されることから、この平坦な部分は単体の状態で加工を進めるために板材を安定させる役割を果たしていたと考えら

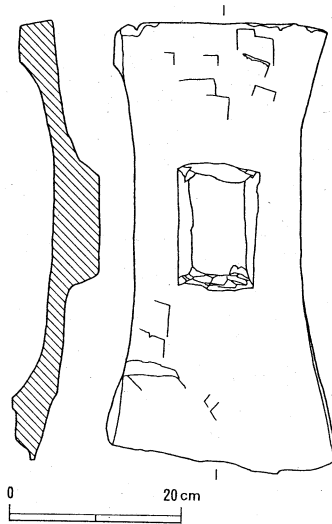


図3 単体製作による未製品

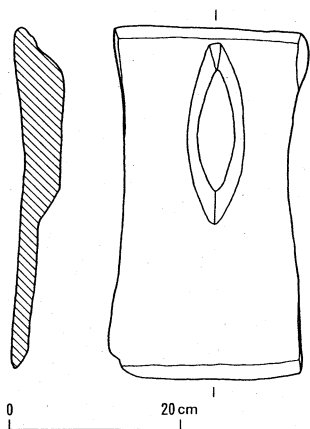


図4 未製品に残る切断痕

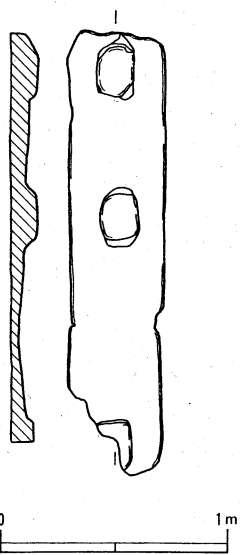


図5 本山遺跡の連結未製品

れる。連結製作は長い板材のまま加工を進めるため、このような平坦面は必要ではない。そのため、一個体ずつに切断される直前の段階のものには平坦面が存在しない。次に、切断痕についてであるが、切断痕とは連結で製作していたものを一個体ずつに分断した時につけられるものである。切断は表裏の両側から行われるため、端部はV字状になる。唐古・鍵遺跡には前期後半に属する未製品の中に切断痕を持つものが存在している（図4）。

3点目の隆起部を四角く整形した状態のままであることは、本山遺跡例のみに認められるが、これもやはり、諸手鍬にも認められる。ただ、ここで重要なことは、弥生時代前期に属する連結製作では、隆起部を紡錘形に加工したのち、一個体ずつに分断するという作業を行っていることである。

以上のことから、本山遺跡や唐古・鍵遺跡の広鍬は一個体分の板材から加工を行う、単体製作によって製作されたものといえる。

また、本山遺跡には前期前半に属する広鍬の連結した未製品も出土している（図5）。これは連結製作の存在を示す現

段階では最も古い資料である。一個体分の法量は、刃部幅約 20cm、長さが 30cm 前後となる。本山遺跡の単体の未製品や完成品をみると、広鋏Ⅱ式の未製品は刃部幅が約 16cm、長さが約 26cm であり、完成品は刃部幅が約 15cm、長さが 30cm 程度である。そのため、この連結未製品は広鋏Ⅱ式のものであると考えられる。つまり、弥生時代前期前半には、広鋏Ⅰ式は単体製作によってのみ製作されていた可能性が指摘できる。広鋏Ⅰ式と諸手鋏は形態が類似していることはすでに指摘した。製作工程からも、広鋏Ⅰ式は諸手鋏から変化したものであるといえる。

②連結製作の創出

次に、弥生時代の鋏を製作するために一般的に行われている連結製作という製作工程が、いつどこで行なわれるようになったかについて考えてみる。

弥生時代に新しく出現する道具は、朝鮮半島から伝わったものであり、最初に伝わったのは北部九州地域である。し

かし、北部九州地域では単体製作が行われていることから、朝鮮半島ですでに連結製作が行なわれていたとは考えにくい。つまり、この製作工程は日本において行なわれるようになったものであるといえる。現状では、本山遺跡例が最も古い資料である。しかし、実際にどの地域で最初に行なわれたかは類例の増加を待つ必要がある。前期前半に属する連結製作が他の木製品についてはみられないことから、この製作工程は、まず、広鋏Ⅱ式を作るために行われるようになったと考えられる。

その要因としては、広鋏Ⅱ式は法量が小さく、

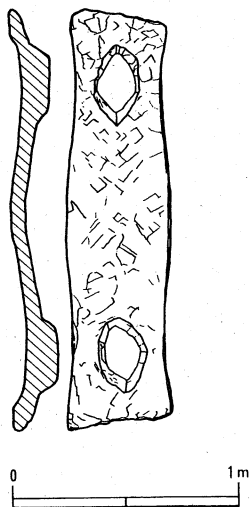


図6 広鋏Ⅰ式の連結製作

一個体ごとに加工を行う上で、安定性に欠けることが挙げられる。

広鋏I式を連結させて製作するようになる時期については、福岡県下稗田遺跡に前期中葉に属し、裏面に平坦面を削り残している連結製作で作られた未製品が存在する(図6)。この資料は単体製作から連結製作へと変化した直後の資料と考えられ、現時点では最も古い資料の1つである。同時期の資料として、大阪府田井中遺跡例が挙げられる。その後、奈良県唐古・鍵遺跡、三重県納所遺跡、滋賀県川崎遺跡などにおいて前期後半に属する資料が確認でき、これらには、平坦面は残されていない。つまり、弥生時代前期後半には東北部九州地域～東海地方西部において同じ製作工程で広鋏が作られるようになるのである。

(4) 製作工程の簡略化

単体製作から連結製作へと変化した後にも、変化が認められる。隆起部の加工の変化に注目すると、広鋏I式に連結製作が適用され始めた当初は、大阪府田井中遺跡例のように、隆起部を作り出す部分を正方形に残し、そのほかの部分に平らに加工するものがある(図7-1)。時期が下ると、唐古・鍵遺跡などでみられるように、平らにする加工と併行して隆起部を仕上げるようになる(図7-2)。それにより、隆起部は細長くなり、隆起部

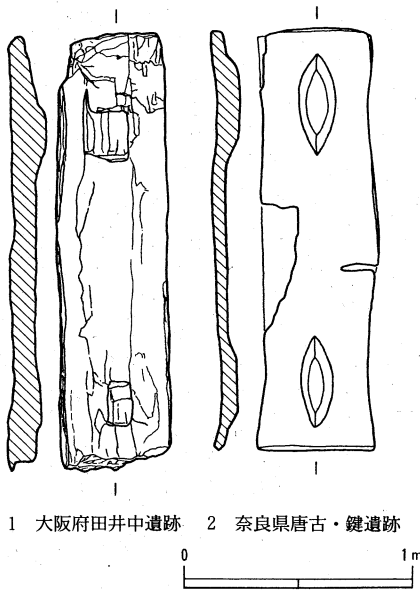


図7 製作工程の簡略化

の立ち上がりが緩くなる。

このような工程の簡略化は、主に近畿地方においてみとめられ、島根県西川津遺跡、同タテテショウ遺跡では中期に属すると考えられる泥除け装着装置c類を持つものであってもいろいろな方向から加工を行っている（島根県教育委員会 1988、1990）。また、東北部九州地域などでは中期に属する未製品は四角く隆起部分を残しているものがみられる（北九州市教育文化事業団 1989）。

(5) 変化の要因

連結製作は生産効率を上げ、規格品を量産するものとして評価されている（飯塚 1999）。しかし、検討してきたように連結製作という製作工程が生み出された要因としては、加工する際の材の安定性を確保するという意味がむしろ大きかった可能性が高い。

前期前半段階では広鋏I式には単体製作を行い、他の広鋏には連結製作を行っていたが、前期後半にはすべての広鋏を連結製作で作るようになる。つまり、法量の異なるものを別々の工程で製作するあり方から、同じ製作工程にするように変化している。また、隆起部の加工を簡略化することも行っている。これらのことから、広鋏I式の製作工程の変化はその効率化に伴う変化であるといえる。

他の木製品において変化がみられるものには、狭鋏と竪杵があるが、これらは広鋏とは異なり変化前の形態が前期の間は残存する。広鋏の製作工程が効率化を求められた要因として、その必要量が多かったことが挙げられる。広鋏は木製品が出土するほぼすべての遺跡から見つかることから、かなり多く使用され、その生産・廃棄のサイクルは他の道具よりも早かったといえる。そのため、形態の変化が起こりやすく、大量に製作するために、製作工程を変化させ、簡略化を行うなどの効率化が図られたと考えられるのである。

3. 縄文晩期後半～弥生前期における広鋏I式の変化と地域性

表2 諸手鋏出土地名表

遺跡名	所在地	時期	備考
板付遺跡	福岡市博多区	晩期後半	未あり
雀居遺跡	福岡市博多区	晩期後半	未あり
三筑遺跡	福岡市博多区	前期	
瑞穂遺跡	福岡市博多区	前期前半	
比恵遺跡	福岡市博多区	前期後半～中期前半	
鶴町遺跡	福岡市早良区	晩期後半～前期前半	未
橋本一丁田遺跡	福岡市西区	晩期後半～前期前半	
拾六町ツイジ遺跡	福岡市西区	前期初頭～前期後半	未あり
四箇遺跡	福岡市西区	前期後半～中期	
田島遺跡	佐賀県唐津市	晩期後半～前期	未
菜畑遺跡	佐賀県唐津市	晩期後半～中期	未あり
梅白遺跡	佐賀県唐津市	前期後半	
里田原遺跡	長崎県田平町	前期後葉～中期初頭	
松木遺跡	愛媛県今治市	前期初頭	未

前期を通じて北部九州地域で主体を占める(表2)。弥生前期前半には広鋏I式が出現し、大阪湾沿岸地域まで分布する。さらに、前期後半には北部九州地域～伊勢湾沿岸地域まで分布が拡大する(図8)。

(2) 時期による形態変化

前期前半の広鋏I式は、本山遺跡の未製品をみるかぎり、平面形はくびれる部分がほぼ中央付近にあり、柄孔とは高さは一致していない。長さは40cm程度で幅は30～25cm程度であるが幅のばらつきは大きい。側面からみた反りの幅は2cm程度である。隆起部がA1型であることは前期を通じて同じであるが、前半のものは長さとの割合は1.5:1程度である(図2-1)。

前期後半にはくびれ部と柄孔とが同じ高さになる。唐古・鍵遺跡の未製品の場合、長さは40cm程度のみであるが、幅が20cm程度になる。幅のばらつきは小さくなる。側面形は、反りの幅が1cm程度になり、わずかに反る程度になる。隆起部は製作工程が簡略化されることにより、細長くなる。割合は3:1～4:1程度である(図4、図7-2)。ただし、前半段階の状態をとどめるものもある。

(1) 広鋏I式の分布の変化

時期による分布の変化をみると、縄文晩期後半に属する広鋏I式の資料はみられない。この時期の広鋏には諸手鋏があるが、玄界灘沿岸の地域にほぼ分布が限られている。諸手鋏は弥生

泥除け装着装置 a 類や b 類を施されたものは前期後半から出現する⁴⁾。a 類と b 類の両方が施されているものが多いが、どちらか一方のものも存在し、施されていないものもある。

(3) 広鋏 I 式の成立過程

鋏などの弥生時代から出現する木製品は、朝鮮半島から伝播してきたものと考えられているが、北部九州地域では広鋏 I 式はほとんど存在せず、諸手鋏を用いている。広鋏 I 式と

諸手鋏の分布 (縄文晩期～弥生前期)



広鋏 I 式の分布 (弥生前期前半)



(前期後半)

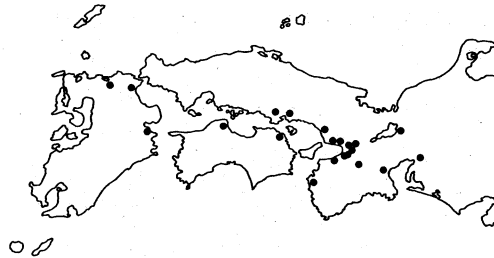


図8 広鋏の分布の変化

諸手鋏は形態が類似し、製作工程が共通していることから、諸手鋏を知りえた地域の人によって、広鋏 I 式が創り出されたと考えられる。現状では、北部九州地域以外では愛媛県松木遺跡からのみ諸手鋏が出土している。このことから、前期前半に諸手鋏が瀬戸内地域に伝わり、そこで隆起部の位置が上に上げられ、広鋏 I 式が創出された可能性が高い。この時点では側辺のくびれや反りの中心は動かず、板材の真ん中付近にある。前期後半に

はくびれや反りが隆起部に対応する位置にくるように加工されるようになる。

つまり、朝鮮半島から直接鍬が伝えられたのは北部九州地域のみであり、それ以東の地域は北部九州地域からもたらされたものを変化させて広鍬Ⅰ式を創り出したといえる。

植生の点からもこのことを補強できる。朝鮮半島は日本列島とは異なり、ほとんどの地域が落葉広葉樹林帯に属し、照葉樹林帯は南端部に限られる。しかし、南端部にある義昌茶戸里遺跡から出土した木棺にはクヌギ節が利用されている。また、光州新昌洞遺跡や務安良将里遺跡で出土している鍬はすべてクヌギ節である。北部九州地域の中でも玄界灘沿岸地域の諸手鍬には、縄文晩期後半のものにクヌギ節のものがみられたが、弥生前期以降のものはアカガシ亜属が使われるようになっている。その他の地域のもは前期に出現して以降アカガシ亜属を利用している。近畿地方などに朝鮮半島から直接影響を受けた場合、北部九州地域と同様の変化がみとめられると考えられる。

(4) 小結

以上のことから、広鍬Ⅰ式は諸手鍬から形態変化したものと理解するのが妥当である。また、前期後半から広鍬Ⅰ式に連結製作が行われることによって、幅のばらつきがおさえられ、隆起部の加工が簡略化されるため、隆起部が細長くなるという形態の変化が起きている。

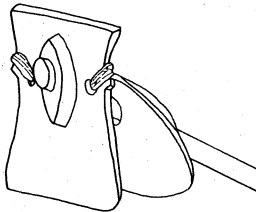


図9 泥除け固定方法

また、泥除け装着装置についても若干の知見を得ることができた。前期には広鍬Ⅱ式も存在しているが、広鍬Ⅰ式が法量の面で、ひとまわり大きい。同時期の泥除けの法量と比較すると、広鍬Ⅰ式にのみ泥除けがつけられ

たとえられる。前期における泥除け装着装置はこれまで、両側面の突起 (a 類) や双孔 (b 類) に紐をかけて固定すると想定されてきた (図 9)。しかし、b 類には紐をかけたような痕跡はあまり認められず、泥除け自体にも紐をかけるような加工はみられない。ここで注目できるのは、広鋏 I 式には隆起部側を外彎面として反る、という加工が施されていることである。中期からみられる突帯 (c 類) は泥除けが跳ね上がらないようにするための加工であり、反らせる加工にもその機能があったと考えることができる。つまり、前期において泥除けを固定する機能は反りが主に果たしていたと考えられ、c 類は反りからの形態変化と捉えることがで

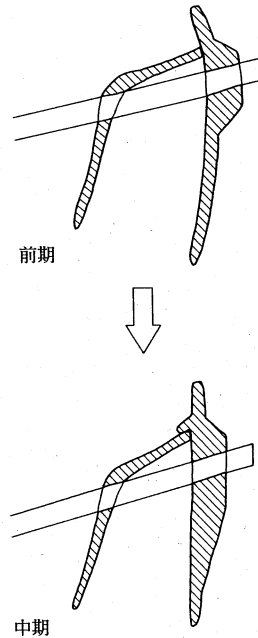


図10 泥除け装着装置の変化

きる (図 10)。a 類や b 類は反りが弱くなる前期後半に出現していることから、泥除けの固定を補助する機能を有していた可能性はある。

4. 弥生時代前期における木製品の画期

(1) 画期の設定

以上、広鋏 I 式について検討してきたが、そこから北部九州地域以東では、弥生時代前期中葉という時期を画期として抽出することができた。

広い範囲ではほぼ同時期に変化がみとめられることから、それには弥生時代に新たに出現する木製品の受容と関わりがあるのではないかと考えられる。また、各地域でその様相が異なることは、地域ごとに受容する過程が

異なっていたことを示していると考えられる。そこで、各地域の状況を整理することで、木製品の受容過程について見通しを述べることにする。

(2) 弥生時代の木製品の受容過程

広鋏Ⅰ式の製作工程に最も変化がみとめられるのは近畿地方である。そこで、まず近畿地方の状況を把握してみよう。

近畿地方では、弥生時代前期前半に広鋏をはじめ、狭鋏Ⅰ式や鋤、斧柄といった木製品が出現する。前期後半には広鋏の製作工程が変化し、狭鋏Ⅱ式が新たに出現する。また、未製品も含めてこのような木製品が出土する遺跡数が増加する。

このことから、ひとつの地域に木製品を持ち込んだ集団またはそれを受容した集団がそのまま利用木材や製作工程を変えずに製作を行う段階と、新たに木製品を製作・使用する集団が増えるに従い、地域の状況に適した製作を行うようになる段階という2つの段階があったと考えられる。つまり、広鋏Ⅰ式の製作工程の変化やそれに伴う形態の変化は、新しい道具を受容する際の情報の改変を表している可能性が高いのである。

このような視点に基づいて、西日本の状況を見ると、北部九州地域では玄界灘沿岸地域において前期前半に利用する樹種が変化していることが変化期としてとらえられる。他の地域においては、現状では資料が少ない地域が多く、明確に変化が認められるのは近畿地方のみである。しかし、東北部九州地域～東海地方西部においては前期後半段階から確実に未製品が存在することから、製作を開始していることは指摘できる。

(3) 西日本における弥生時代前期

木製品によって整理できた状況は、他素材の道具によって検討されてきたことと重なる部分が多い。北部九州地域においては弥生前期前半から、東北部九州地域～近畿地方においては弥生前期後半から、本格的に大陸系磨製石器の生産が行われるようになるとされている(下條 1998、埋蔵文化

財研究会 2000)。また、縄文系の突帯文土器が減少・消滅し、遠賀川式土器が地域の主体を占めるようになるのも前期後半からである(田畑 1997、家根 1997)。

しかし、北部九州地域～近畿地方においては、弥生時代に新たに出現する道具の形態が安定するのは前期末～中期初頭の変化期以降である。この時期は様々なものの変化期にあっており、利用石材や利用木材に中期へと継続する要素が現れる時期でもある。そのため、弥生文化が完全に西日本の各地域に受容されるのはこの変化期からであると考えられる。

つまり、西日本における弥生時代前期という時期は縄文時代から弥生時代に移り変わっていく過渡期として考えることができ、前期自体をひとつの大きな変化期としてとらえることも可能ではないかと思われる。

おわりに

広楯 I 式という資料をもとに、未製品という視点を加えることにより、製作工程の変化を見出し、木製品によっても弥生時代前期を二分することができることを示した。また、その変化の要因についても従来考えられてきたような農耕技術の発達や可耕地の土壌との関わりで説明するよりは、弥生時代から出現する道具の受容過程と関連付けることで理解できるものとしてとらえた。それにより、木製品における変化を土器や石器の変化と有機的に結び付けて考えることもできるようになったと思われる。すなわち、これまで土器や石器の研究から検討されてきた弥生文化の受容について、木製品からも発言が可能であるということを示すことができたのではないかと思う。

このような視点をもち木製品研究という立場から、弥生時代前期という時期の意義付けを行うと、北部九州地域～近畿地方においては楯などの形態が比較的安定するのは中期であることから、それに至る模索段階にあっ

たとえることができる。

今後、このことをより詳細に理解するために、本稿と同様の作業を通じて、前期末～中期初頭の変化期についても検討していく必要があると考えている。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、まず、ご指導下さっています都出比呂志先生、福永伸哉先生、高橋照彦先生に御礼申し上げます。また、以下の方々や諸機関には資料見学などでお世話になるとともに、貴重な御助言をいただきました。特に、大阪府文化財センター、神戸市教育委員会、田原本町教育委員会には未公表資料の掲載を許可していただきました。記して感謝申し上げます。

秋山浩三・川崎雅史・川瀬貴子・久貝健・千種浩・藤田三郎・村松一秀・大阪府文化財センター・春日井市教育委員会・神戸市教育委員会・神戸市埋蔵文化財センター・御坊市教育委員会・田原本町教育委員会・出土木器研究会・木器勉強会・大阪大学考古学研究室の皆様（敬称略）

注

- 1) 広楯Ⅰ式に注目する理由として、それが弥生時代前期の広楯の中で最も資料が多く、未製品も多い。また、木製品の中でも多く出土するもののひとつであることが挙げられる。つまり、広楯Ⅰ式は当時最も一般的に使われた道具のひとつであると考えられる。その変化の状況をとらえることにより、木製品にとどまらず、他の道具の変化についても何らかの示唆を得ることができると思われるからである。
- 2) 「連結製作」という語句の指すものは従来「連続製作」といわれてきたものと同じである。しかし、「連続製作」という場合、工程が連続しているのか、製作しているもの自体が連続しているのかが分かりにくい。そのため、製作しているもの自体が複数個体つながっているということを明確に表現するために、本稿では「連結製作」という語句を用いる。
- 3) 溝から出土した資料であるため、詳細な時期は不明である。
- 4) 愛媛県阿方遺跡から、縄文晩期後半～弥生前期前半に属するものとして報告されている資料が出土している。現状ではこの資料が最も古いものであるが、まとまった資料がみられるようになるのは前期後半からである。また、阿方遺跡例は河道からの出土であり、共伴土器が突帯文土器1個と

少ないことから、時期を決定することが困難であると考える。

図版出典

- 図1：上原真人（編）1993『木器集成図録－近畿原始編－』奈良国立文化財研究所を一部改変して再トレース
- 図2：筆者作成図面をトレース。兵庫県本山遺跡例、奈良県唐古・鍵遺跡例ともに未公表資料であり、神戸市教育委員会、田原本町教育委員会の御好意により資料の掲載を許可していただきました。記して感謝いたします。
- 図3：唐津市教育委員会 1982『菜畑遺跡』分析・考察編から一部改変して再トレース
- 図4：田原本町教育委員会 1986『昭和59年度唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報・黒田大塚古墳第2次発掘調査概報』からトレース
- 図5：筆者作成図面をトレース。未公表資料であり神戸市教育委員会の御好意により資料の掲載を許可していただきました。記して感謝いたします。
- 図6：下稗田遺跡調査指導会 1985『下稗田遺跡』から一部改変して再トレース
- 図7：大阪府教育委員会 1999『田井中遺跡発掘調査概要Ⅷ』、田原本町教育委員会 1984『昭和58年度唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報・黒田大塚古墳第1次発掘調査概報』から一部改変して再トレース
- 図9：上原真人 1991「農具の変遷－鍬と鋤－」『季刊考古学』第37号 雄山閣出版から一部改変して再トレース

参考文献

- 青島啓 2003「弥生～古墳時代の木製農耕具について－柄孔広鍬を中心に－」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会：pp. 123～136
- 秋山浩三 1999「近畿における弥生化の具体像」『論争古代吉備』考古学研究会：pp. 189～222
- 飯塚武司 2001「農耕社会成立期の木工技術の伝播と変容」『古代学研究』第155号 古代学研究会：pp. 20～32
- 上原真人（編）1993『木器集成図録－近畿原始編－』奈良国立文化財研究所
- 金閔恕・大阪府立弥生文化博物館 1995『弥生文化の成立－大変革の主体は「縄紋人」だった』角川書店
- 木村勇作 1988「木製農耕具について－東海地方西部における一様相－」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会：pp. 89～97
- 北九州市教育文化事業団 1989『岡遺跡』

- 工藤哲司 1996 「中在家南遺跡・押口遺跡出土の木製品類」『中在家南遺跡他』
第2分冊 分析・考察編 仙台市教育委員会：pp. 279～337
- 黒崎直 1970 「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』第16号第3
号 考古学研究会：pp. 21～42
- 国立歴史民俗博物館 1996 『農耕開始期の石器組成1』近畿（大阪・兵庫）・中
国・四国
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所・東日本埋蔵文化財研究会 1994
『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具から見る—』
- 正林護 1998 「木製農具の発展」『原始・古代の長崎県 通史編』長崎県教育委
員会：pp. 359～365
- 島根県教育委員会 1988 『西川津遺跡発掘調査報告書IV』
- 島根県教育委員会 1990 『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書III』
- 下條信行 1994 「弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研
究」平成5年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告
書
- 下條信行 1995 「農工具と稲作経営の受容」『弥生文化の成立—大変革の主体は
「縄紋人」だった』角川書店：pp. 54～69
- 下條信行 1998 「日本における石器から鉄器への転換形態の研究」平成7年度
～平成9年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 田畑直彦 1997 「畿内第I様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集I』
立命館大学考古学論集刊行会：pp. 79～99
- 寺前直人 2001 「弥生時代開始期における磨製石斧の変遷—中部瀬戸内地域と
大阪湾沿岸地域を中心として—」『古文化談叢』第46集 九州古
文化研究会：pp. 27～52
- 中川寧 2000 「出雲における木製耕起具の変遷について」『島根考古学会誌』第
17集 島根考古学会：pp. 73～98
- 仲原知之 2002 「弥生前期の石庖丁生産と流通—近畿における石庖丁生産・流通
の再検討（III）—」『紀伊考古学研究』第5号 紀伊考古学研究
会：pp. 1～14
- 根木修 1976 「木製農耕具の意義」『考古学研究』第22巻第4号 考古学研究会：
pp. 93～116
- 禰宜田佳男 1999 「伐採石斧の柄」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究
室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室、大阪大学考古
学友の会：pp. 69～94
- 樋上昇 1989 「木製農耕具の地域色とその変遷—勝川遺跡出土資料を中心とし

てー』『年報 昭和63年度』愛知県埋蔵文化財センター：pp. 92～125

樋上昇 1990「弥生時代中期における木製農具の器種組成について」『岡島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター：pp. 80～97

埋蔵文化財研究会 1983『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料

埋蔵文化財研究会 2000『弥生文化の成立—各地域における弥生文化成立期の具体像—』第47回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

森岡秀人 1993「初期稲作志向モデル論序説—縄文晩期人の近畿的対応—」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室：pp. 25～53

家根祥多 1997「朝鮮無文土器から弥生土器へ」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会：pp. 39～64

山口譲治 1989「出土木器について」『板付周辺遺跡調査報告書(15)—高畑遺跡第12次調査地点—』福岡市教育委員会：pp. 104～108

山口譲治 2000「弥生時代の木製農具—韓国光州新昌洞遺跡出土農具から—」『韓国古代文化の変遷と交渉』伊世英教授停年記念論集刊行委員会：pp. 587～622

遺跡報告書

北部九州地域

- ・板付遺跡：『板付』1976 福岡市教育委員会、『板付』1981 福岡市教育委員会
- ・雀居遺跡：『雀居遺跡2』1995 福岡市教育委員会、『雀居遺跡5』2000 福岡市教育委員会、『雀居遺跡6』2001 福岡市教育委員会
- ・三筑遺跡：『福岡市学校建設地内遺跡調査報告書—三筑遺跡・次郎丸高丸遺跡』1981 福岡市教育委員会
- ・瑞穂遺跡：『瑞穂』1980 日本住宅公団
- ・比恵遺跡：『比恵遺跡—第六次調査遺物編—』1986 福岡市教育委員会、『比恵遺跡群(9)』1990 福岡市教育委員会、『比恵遺跡群(10)』1991 福岡市教育委員会、『比恵遺跡群(11)』1992 福岡市教育委員会
- ・鶴町遺跡：『福岡市西区大字免鶴町遺跡』1979 福岡市教育委員会
- ・橋本一丁田遺跡：『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告—5—福岡市西区橋本一丁田遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査』1998 福岡市教育委員会

- ・拾六町ツイジ遺跡：『拾六町ツイジ遺跡』1983 福岡市教育委員会
- ・四箇遺跡：『四箇周辺遺跡発掘調査報告書(2)』1980 福岡市教育委員会、『福岡市早良区四箇遺跡』1987 福岡県教育委員会、『福岡市四箇遺跡群—第23次調査—』1989 福岡県教育委員会
- ・田島遺跡：『柏崎遺跡群』1980 佐賀県教育委員会
- ・菜畑遺跡：『菜畑遺跡』分析・考察編 1982 唐津市教育委員会
- ・梅白遺跡：『末盧国を掘る』2001 国土交通省佐賀国道工事事務所、佐賀県教育委員会、三浦あずさ 2002「唐津市梅白遺跡の木製農耕具から」『考古学ジャーナル486』ニュー・サイエンス社
- ・里田原遺跡：『里田原』1988 長崎県田平町教育委員会

東北部九州地域

- ・下稗田遺跡：『下稗田遺跡』1985 下稗田遺跡調査指導会
- ・下郡(桑苗)遺跡：『下郡桑苗遺跡』1989 大分県教育委員会、『下郡桑苗遺跡II』1992 大分県教育委員会

瀬戸内地域

- ・南溝手遺跡：『南溝手遺跡2』1996 岡山県教育委員会
- ・百間川原尾島遺跡：『百間川原尾島遺跡4』1995 建設省岡山河川工事事務所、岡山県教育委員会、『百間川原尾島遺跡5』1996 建設省岡山河川工事事務所、岡山県教育委員会
- ・山越遺跡：『松山市埋蔵文化財調査年報III』1991 松山市教育委員会
- ・松木遺跡：『一般国道今治道路埋蔵文化財発掘調査報告書II』1989 愛媛県埋蔵文化財センター
- ・阿方遺跡：『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』2000 愛媛県埋蔵文化財センター
- ・鴨部・川田遺跡：『鴨部・川田遺跡I』1997 香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、建設省四国地方建設局、『鴨部・川田遺跡II』2000 香川県埋蔵文化財研究会

近畿地方

- ・奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録—近畿原始篇—』
- ・東神吉遺跡：『加古川市東神吉遺跡—第2次調査略報—』1968 兵庫県教育委員会、加古川市教育委員会
- ・上ノ島遺跡：『尼崎市上ノ島遺跡』1973 尼崎市教育委員会
- ・本山遺跡：『神戸市埋蔵文化財年報』平成7年度 1998 神戸市教育委員会
(未発表資料については筆者実見による)
- ・北青木遺跡：『北青木遺跡』1986 兵庫県教育委員会
- ・瓜破遺跡：杉原荘介(編) 1961『日本農耕文化の生成』東京堂

- ・安満遺跡：『高槻市史第6巻－考古編－』1973 高槻市史編纂委員会
- ・東奈良遺跡：『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ』1979 東奈良遺跡調査会、『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅱ』1981 東奈良遺跡調査会
- ・田井中遺跡：『田井中遺跡発掘調査概要Ⅴ』1996 大阪府教育委員会、『田井中遺跡発掘調査概要Ⅷ』1999 大阪府教育委員会、『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）』1997 大阪府文化財調査研究センター
- ・瓜生堂遺跡：（未発表資料、筆者実見による）
- ・池島・福万寺遺跡：『池島・福万寺遺跡2』2002 大阪府文化財センター
- ・池上曾根遺跡：『池上遺跡 第4分冊の1－木器編－』1978 大阪文化財センター
- ・高宮八丁遺跡：『高宮八丁遺跡（木器編）』1989 寝屋川市教育委員会
- ・鬼虎川遺跡：『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』1998 東大阪市教育委員会、東大阪市文化財協会
- ・唐古・鍵遺跡：『大和唐古弥生式遺跡の研究』1943 京都帝国大学文学部考古学研究室、『昭和58年度唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報・黒田大塚古墳第1次発掘調査概報』1984 田原本町教育委員会、『昭和59年度唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報・黒田大塚古墳第2次発掘調査概報』1986 田原本町教育委員会、『昭和60年度唐古・鍵遺跡第20・24・25次発掘調査概報』1986 田原本町教育委員会、『唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報』1988 田原本町教育委員会
（未発表資料については筆者実見による）
- ・川崎遺跡：『国道8号線長浜バイパス関係遺跡調査報告書』1971 滋賀県教育委員会
『長浜市史』第1巻 1996 長浜市史編さん委員会
『ムラの変貌－稲作と弥生文化－』1998 滋賀県立安土城考古博物館
- ・堅田遺跡：久貝健 2000「堅田遺跡前期環濠集落」『弥生文化の成立－各地域における弥生文化成立期の具体像－』第47回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会『堅田遺跡 弥生前期環濠集落』2000 御坊市

東海地方

- ・納所遺跡：『納所遺跡－遺構と遺物－』1980 三重県教育委員会
- ・松河戸遺跡：『松河戸遺跡－安賀地区発掘調査の概要－』2000 春日市教育委員会

(大学院後期課程学生)

SUMMARY

A First Step in the Evolution of Wooden Artifacts during the Early Yayoi Period in Japan - with special reference to a change of manufacturing process of wide-edged hoe type I-

Kei NAKAHARA

The purpose of this paper is to examine the evolution of wide-edged hoe in western Japan during the Early Yayoi Period. Wide-edged hoe is thought of one of agricultural tools, so the regional and temporal changes of the form were caused by various conditions of agriculture. Observing unfinished products of wide-edged hoe type I, The author finds that the manufacturing process changed in the later half of the Early Yayoi Period. At the same time, the form changed more or less. A lot of new tools from Korean peninsula, polished stone axes and adzes, wooden agricultural tools and so on, spread in western Japan in this period. So, the author concludes that people who accepted these tools improved the process when they began to make them themselves. In other words, this change of wide-edged hoe type I was associated to acceptance of Yayoi Culture.

キーワード：弥生時代前期 広鋤 I 式 製作工程 文化受容